令和４年 12 月５日

京口門だより No. 110

師走の声を聞いたとたんに寒波が訪れました。今年は暑さ寒さが急にきて体調の管理にとまどいます。「寒き日や川に落ちこむ川の水」（永井荷風）

前回は関節リウマチの病気について述べました。今回はその治療の歴史や内容について述べてみたいと思います。漢方医学では関節リウマチのことを古くから歴節風という名があります。身体の関節という関節が痛んでくるという意味です。また鶴膝風という名もあります。リウマチが慢性化してくると膝関節は腫れて痛みます、そして周りの筋肉は痩せて細くなり、まるで動物の鶴の脚のように見えることがあります。また痛風という名で呼ばれることもあります。痛風といえば今日では血中の尿酸が増え、足指関節にたまって赤く腫れ痛む病気を意味していますが。漢方では関節リウマチをそう呼んでいました。いずれも風という文字が付きますが、あちこちと痛みや腫れが移動するという意味と、風邪・寒邪・湿邪の三者によって起こってくると考えていたからです。しかし現代では関節滑膜を異物として自己の抗体が作られ、関節に炎症をきたす自己免疫疾患と考えられています。

漢方では風・寒・湿が原因とみて、風を除く桂枝や麻黄という薬をよく使います。また寒を除く附子を用います。湿を除く朮や薏苡仁や茯苓も用いられます。起こってきた関節の炎症を治すために石膏や知母という薬を用います。こうした薬の組み合わせで関節の炎症を治し、変形を防ぐようにしてゆきます。私もかつて何十例という関節リウマチの患者さんの漢方治療の経過を調べたことがあり、関節の痛みや腫れはある程度治すことはできても、なかなか関節の変形の進行を止めることができないことが判りました。

一方現代医学では昔は鎮痛剤の投与に過ぎなかった治療が、副腎皮質ホルモン(いわゆるステロイド)が見出されて劇的に炎症が治まり、痛みや腫れが治るようになりましたが、長期間の使用による副作用が強く、優れた治療薬とはなりませんでした。次に金製剤が見出され関節リウマチの免疫現象を抑える意味で使われるようになりましたが、これも副作用が多く次第に使用が避けられるようになりました。この 10～20 年の間に合成抗リウマチ薬や生物学的製剤が見出され、関節リウマチの治療が大きく進み、痛みや腫れを治すだけでなく、関節の破壊を防ぎ、変形が進むのを防ぐことができるようになりました。しかし副作用は色々とあり、最新現代医薬と漢方薬との併用がより安心できる治療法ではないかと思われます。